

「私にもできる！ 人と人とのつながりを活かした
復興支援の事例紹介 ～福島県浜通りでの実践例～」

（いわて男女共同参画フェスティバル2019 第4分科会）

議事録

復興庁男女共同参画班

議事次第

日 時：令和元年6月15日(土) 13:15～14:45

場 所：いわて県民情報交流センター（アイーナ）7階 701

1 復興庁男女共同参画班の紹介及び本分科会の趣旨説明

復興庁男女共同参画班 主査 秋田 宇慶

2 事例紹介

① いわき・双葉の子育て応援コミュニティcotohana 代表 鈴木 みなみ氏

② なみとも 代表 小林 ^{な お こ}奈保子 氏

3 パネルディスカッション

4 質疑応答

5 閉会挨拶

復興庁男女共同参画班 参事官 原田 浩一

○司会（安居）：それでは定刻となりましたので、ただいまから、復興庁男女共同参画班主催による「いわて男女共同参画フェスティバル2019 第4分科会『私にもできる！人と人とのつながりを活かした復興支援の事例紹介 ～福島県浜通りでの実践例～』」を開会いたします。これから14時45分までの1時間30分の開催となります。

改めまして、皆さんこんにちは。本日は当分科会にご参加いただき、誠にありがとうございます。私は本日の司会進行を務めます、復興庁男女共同参画班の安居と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは始めに、復興庁男女共同参画班の紹介と、本日の分科会の趣旨説明を復興庁男女共同参画班の秋田主査から説明いたします。秋田主査は後半のパネルディスカッションでコーディネーターも務めます。それではよろしくお願いいたします。

【復興庁男女共同参画班の紹介及び本分科会の趣旨説明】

○秋田主査：復興庁男女共同参画班の秋田と申します。本日は我々どもの分科会にご参加をいただきまして、ありがとうございます。

まず我々どもの班の紹介をさせていただきたいと思いますが、復興庁男女共同参画班では、こちらの一枚紙にありますように、「復興のあらゆる場面に男女共同参画の視点を導入することでより良い復興につなげる。」ことを目的に活動しておりまして、「復興に男女共同参画の視点を持つことの必要性に対する理解の促進・浸透」させるために、具体的には事例集の作成・公表と、パネルディスカッション、シンポジウム等イベントの開催の2つを大きな柱に取り組んでおります。

事例集の作成・公表につきましては、皆様にお配りしております冊子になりまして、2019年4月時点で112事例を公表しております。

シンポジウム等イベントの開催につきましては、過去の取組の一部を皆様にA3で印刷して配布しております。

「復興に男女共同参画の視点を持つことの必要性に対する理解を促進・浸透」させるということで、どのようなことをしているか一部、A3で配布しております資料を用いて紹介したいと思います。

一昨年もこのフェスティバルの場をお借りしまして「まちづくりへの女性の関わり方について」というイベントを実施しました。このときは、宮城県の東松島と岩沼の方にお越しいただきました。

復興のトッランナーともいわれている岩沼のまちづくりの事例では、被災沿岸部の6地区から各地区の地区長、若者代表、女性の代表の三人一組の住民が集う「まちづくり検討委員会」を設置し、まちづくりの専門家の意見を交えながら、行政主導ではなく住民主体のまちづくりを進めていったということです。

6地区には、それぞれより小さな自分の住まいの地区があり、まずは自分の住まいの地区で話し合い、

そこでの意見を検討委員会に上げて議論し、一度で決まらない場合は検討委員会から住まいの地区に持ち帰り話し合いをしました。

住まいの地区での話し合いには各家庭から一人は参加してもらい、住まいの地区での話し合いに併せて各家庭で家族会議が開催をすることで、男女に限らず若者からお年寄りまで多様な方の意見を踏まえたまちづくりが進められました。

このような事例、ジェンダーやダイバーシティに配慮されている事例を紹介しながら、我々どもの班では「復興に男女共同参画の視点を持つことの必要性に対する理解を促進・浸透」させているところです。

さて、本日につきましては、皆さんおそらくこちらのチラシを見て申込みをされたのかと思いますが、このチラシに『被災地の復興のために何かしたい。でも何から始めて、どう続けたいのか分からない…。』という方のために『私にもできる！』と思えるような、人と人とのつながりをつくり、復興に取り組む事例を紹介します。」と記載があります。

東日本大震災から8年3ヶ月が経過しましたが、支援の外部リソースはだいぶ減ってきており、どんどん地域で地域を支えるという体制に移ってきていると思います。とは言っても、復興活動等したことないし、どうすればいいかわからない、どうやって継続していけばいいかわからないという方もいらっしゃるかと思いますので、今回、震災後に特定のテーマや地域課題について、まずは自分にできる活動から開始し、現在も活動を継続されている御二人に福島県の浜通りからお越しいただきました。

鈴木みなみさんはテーマ型で子育て女性のネットワークづくりに携われておりまして、小林 奈保子^{なほこ}さんは浪江町での地域型のネットワークづくりに取り組まれています。

人的ネットワークの形成は、地域リソースの掘起しや地域づくり・コミュニティ形成等の促進につながると考えられますし、復興において女性によるきめ細かな支援は、地域づくりやコミュニティ形成において大きな役割を果たしていると考えられます。

本日は是非、この御二人のお話をお聞きして、どうやって人と人とのつながりをつくって復興支援にどう取り組むのか、どう継続していくかの参考としていただけたらと思います。皆様からのご質問の時間も30分程度設ける予定としておりますので、積極的にご参加いただけたらと思います。

では、本日はよろしくお願いいたします。

○司会（安居）：それではこれより、登壇者からの発表に移らせていただきます。始めに、いわき・双葉の子育て応援コミュニティ cotohana 代表の鈴木みなみ様からの発表です。ご質問は、後半のパネルディスカッションでお受けいたします。それでは鈴木みなみ様、よろしくお願いいたします。

【いわき・双葉の子育て応援コミュニティ cotohana 代表 鈴木 みなみ氏からの事例紹介】

○鈴木氏：（資料1）ただ今ご紹介に与かりました、鈴木みなみと申します。福島県いわき市から今日まいり

ました。今日は子育て支援の取組についてと、その活動の背景にある福島県双葉郡の状況についてお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（資料 2）まず最初に自己紹介からなんですけれども、私自身は福島の出身ではなく、山形県の^{まむろがわまち}真室川町という所の出身でございます。岩手も近くて家族でよく遊びに来ました。それから、短期大学を卒業するまでは山形県で過ごしましたので、20 年間山形におりまして、その後京都の大学に進学しました。

ただですね、進学したのが 2011 年震災の直後でして、当時は東北を出てみたいなという思いで、京都まで逃避を試みてみたんですけど、元々まちづくりの勉強をしたくて京都の大学に進学を希望していたということもありまして、震災が起こった後、気持ちの変化がありました。このまちの変わっていく様子をずっと見ていたいと思うようになりました。大学を辞めることも考えたんですけども、大学は通いながら、京都から東北に通って学生ボランティアとして活動することにしました。その中でも 2011 年の暮れからですね、岩手県によく来ていました。

岩手県の宮古市でだいたい 3 年位ずっとやっていました。月に 2〜3 回は来ていましたし、長期休みには 1 ヶ月から 2 ヶ月程滞在しながら活動していました。当時は専門性も何もない自分でしたけれども、学生ということを活かして、住民たちの媒介役になればいいなと思っていました。その後、2013 年に一緒に活動していた仲間たちと一緒に学生の団体を立ち上げました。この取組を始めて、震災後初めてですね、福島県での活動を始めることになります。そして 2013 年 2 月に初めて福島を訪れたんですけども、そのとき住民さんたちから聞いた言葉がすごく心に残ってまして、この地域で何が起きているのか、それまで岩手と宮城しか行ったことがなかったんですけども、全く違う放射能という、原発事故の影響もある福島県で今何が起きているのかということを知りたくて、その年秋から大学を休学して、地元の NPO 法人に入職して、いわき市それから双葉郡を中心に活動をしてまいりました。

（資料 3）その後、2015 年の 7 月からは「双葉郡未来会議」という民間の団体の設立に立ち会いました。それから 2016 年 9 月にですね、私、今、娘が一人いるんですけども、第一子を授かりまして一線からは引いたんですけども、ライフワークとしてまちづくりの活動には携わってきました。そして、2018 年になってからは自分が母親になったということもありまして、子育て支援の取組をしてみたいなということも思いまして、2018 年子育て支援の事業を始めまして、今年「いわき・双葉の子育て応援コミュニティ cottonaha」として独立しました。ちょっと今日は触れないんですけど、今年 5 月からまたある特定の他の町でも活動してみたいなということで、富岡町というまちで復興支援員として勤務もしております。

（資料 4）先ほどからちょっと度々「双葉郡」という地名を出してきたんですけども、皆さん、双葉郡って聞いたことがありますか。ありがとうございます。震災後、やはり聞くことが多くなりましたかね。2 つの村と 6 つの町、8 町村からなる郡になります。太平洋に面している地域、南北の中心ですね、福島

県の中心にある所なんですけれども、私、山形の出身で雪が多い所の生まれなんですけれども、ここの地域は本当に温暖で、びっくりするくらい年間を通じて雪が降らない地域です。基幹産業は農業と漁業ではあるんですけれども、その一方で戦後は、東京電力の発電所が複数立地する電源立地帯として、エネルギーの供給地でもありました。皆様ご存知のことと思いますが、双葉町と大熊町の間に第一原子力発電所、富岡町、楡葉町の間に第二原子力発電所、広野町には広野火力発電所と3つの発電所がございます。3月11日の震災、原発事故の影響で一時は郡内の市町村、まちごと避難を強いられました。大半の地域が避難指示区域に指定されまして、行政機関も県内それぞれ避難した先で拠点を設けることになりました。

皆様に本日「ふたばいんふお」という冊子をお配りしております。表紙をめくっていただきますと、避難指示区域、今日は時間がなくて丁寧に説明できないんですけど、避難指示区域の変遷というのがあります。今、段階的にこちら解除が進んでおります。震災関連データということで、双葉郡のデータをまとめたものなんですけれども、その中から抜粋してですね、皆さんと一緒に見ていきたいデータがございます。

こちらの冊子のデータが去年の秋、一年に一回、秋に発行しているものなんですけれども、大体半年くらい前のものだとご理解ください。

(資料5)これが5月末、先月末時点での数値になります。8町村の避難者数、町内に避難先から戻って暮らされている方の数値になります。特徴的なところはですね、富岡町と浪江町なんかはですね、2017年に避難指示が解除されまして、少しずつではありますが、まちに人が戻ってきています。ですので、冊子の数値と見比べていただくと、大分増えてきているかなというのが見てもらえるのかと思います。それから大熊町ですね、これ新しい街区が生まれまして、町の帰還困難地域、文字通り帰れない地域ではあったんですけど、特定復興再生拠点というのを設けまして、そこを中心に町内の復旧・復興作業を段階的に進めるということで、今年ようやく町内に人が戻ってきました。先月末のデータでは、25名が帰還していますよ、という数字となっていました。

(資料6)そして、こちらも皆さんと一緒に見ていきたいんです。震災関連死の死者数の数になります。この数を見て多い少ないではないと思うんですけども、直接死の中で、津波や地震で亡くなられた方は岩手県が圧倒的に多かったと思います。一方、福島県は直接死以上に震災関連死が増えております。右側が双葉8町村で、震災関連死された方の数になります。福島県の大半の人、福島県で震災関連死になった方の多くの方が双葉郡の出身の方で、避難先で亡くなられ方も多いかなと思います。

(資料7)そんな中で私たちの取組ですね、「双葉郡未来会議」という団体を立ち上げまして、この文字読んでみますね「双葉郡未来会議とは震災以降、バラバラになった双葉郡の住民同士がつながり、情報や問題を共有し今後役に立てる、双葉8町村の住民が民間レベルで集まる場所です。」ということです。

(資料 8) 活動の柱として、「見る」「知る」「つながる」というのを愚直にやっています。町村の視察ですとか、連携会議又は町民同士が集まりやすいように飲み会なんかもやりながら、顔を合わせる時間というのを取っています。また、皆様にお伝えしたいのは、双葉郡未来会議では「ボイスアーカイブプロジェクト」というのをやっております、双葉郡の方々の経験や思いを貴重な証言集として発信していきたいと思ひまして、こちらホームページなんかで見られるようになっております、是非、隣にいる小林 ^{な お こ} 奈保子 ちゃんの記事もございますし、いろんな方の思いに触れていただけるかなと思ひますので、ご興味のある方がいらっしゃれば是非チェックしていただきたいと思ひます。

(資料 9) ここからが子育て支援の取組になります。先ほどとちょっと重複しますが、2016 年に娘が生まれたのを機に子育て支援の取組をスタートして、昨年度は双葉郡から避難している方の困り事なんかをヒアリングしてきました。そして、今年からは郡内に居住して子育てしている女性を対象にした取組というのを実施しております。下に 3 つ挙げたのが主な活動です。こちらの活動の背景をお伝えしていきたいと思ひます。

(資料 10) まずは「子育てママサロン」と題して、子どもたちの居場所づくりというのをやっております。先ほどお伝えいたしましたように、少しずつですが郡内には人が戻っていて、その中には子どもたちももちろんいます。2015 年に避難指示が解除された檜葉町ではですね、震災後初、今年待機児童が出たという地域もあります。なんですけども、震災前の地縁が崩壊しているということもありまして、どこに誰が住んでいるか分からないという状況もあります。子育てをする女性たちのコミュニティというのは、震災後なかなか見付けられないというのが現状です。そんな中で女性たちが子どもを連れて安心して集える場所を作りたい、場所を作ることで同じように子育てする女性たちが集まり、子育ての不安や悩みの相談先を増やせたらいいなという思いでやっております。

(資料 11) こちらがママサロンの様子になります。子どもを連れてヨガをしたり、お茶を飲みながら、みんなで情報交換しております。

(資料 12) それから、「子育て支援情報誌制作事業」というのもやっております。これは今年着手したいと思っております。子育てする社会インフラがまだ十分とはいえません。双葉郡内で小児科を掲げている病院さんが一つしかないんです。もちろん医療もそうですし、行政サービス、買い物、遊び場など、知っていれば不便や不安が解消される情報がありますので、そういったものを全て対象となる女性たちに伝えていきたいと思ひています。また、変化も大きい地域、変化も早い地域なので、情報格差も大きいかなと思ひてまして、それを背景に子育てに係る情報の収集、整理、配信を私共でやっていきたいと思ひました。情報を伝えていく中で、大変なことばかりではなく遊び場なども増えていますので、子育ての難しさを解消するだけでなく、この地域で子育てする楽しみを増やしてもらいたい、そんな情報を発信できたらと思ひます。

(資料 13) もう一つですね、「ネットワーキング事業」ということで、子育て支援に取り組む団体さん

たち、行政の方たちとのネットワークづくりを今行っています。行政の方たちにお話を聞いたところ、町内で子育てしている世帯への支援が十分とは言えないという状況があります。広域に避難している方が多いですので、お子さんたちも避難先で課題を抱えていらっしゃるって、そちらの方に担当者の方々もどうしても注力をせざるを得なくて、町内に戻ってきたお子さんの支援ができない状況にあります。また、補完する民間の取組ありません。子育て支援の取組をしている団体、震災後は私たち、cotohana だけでございます。それから、そういった状況がありますので、郡外の子育て支援の団体を巻き込んでいくのが重要ではないかなと思っています。地域内外のネットワークを作ることによって、支援を必要としている人に対して確実にアプローチをしていきたい。それから支援された女性たち、被支援者の女性たちがエンパワーメントされていくことで、地域力の向上も期待したいと思っています。

（資料 14）ちょっといろいろ活動のことを軽く話してきたんですけれども、私自身、活動の原動力としているのは、もうこれに尽きます。この地域で私も子育てする一人として、子育てする楽しみを増やしていきたいなというふうに思っています。ですのでまずは、自分がこの地域での暮らしを楽しむ。楽しくなるように工夫していきたい。その工夫している活動というのが、今まで説明してきた取組になるかなと思うんですけど、まずは問題を解決したいではなくて、暮らしが楽しくなるように工夫する、その思いが少しずつ周りに伝染していったらいいなという思いでやっております。以上、少し長くなったんですが、私からのご報告はこれで一旦、区切りとさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

○司会（安居）：鈴木様、ありがとうございました。

続きまして、なみとも代表の小林 ^{な お こ} 奈保子 様からの発表です。小林様、よろしくお願いいたします。

【なみとも 代表 小林 ^{な お こ} 奈保子氏からの事例紹介】

○小林氏：（資料 1）皆さん、改めましてこんにちは。私は今日浪江町から来ました、小林 ^{な お こ} 奈保子 と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

今、鈴木みなみさんから報告があった中の浪江町からまいりました。この福島の地図で双葉郡の一番北側に位置する浪江町という場所です。ちょっと調べたら面積で言うと、岩手県だと陸前高田市よりちょっと小さいくらいかな、まあそれ位の規模の町になります。今日は浪江町の状況と、私も実は浪江の出身ではないんですが、その辺のことで浪江で活動している中身についてお話ししたいと思います。

（資料 2）私の生まれは福島県田村市という場所です。さっき浪江の地図があったんですが、その真横というか、（図表の）赤い所の市の出身です。私の出身地は海に面しておらず、山の中の自然豊かな中ですくすくと育ちました。そのおかげで好奇心がすごく旺盛で、いろいろとやんちゃな部分もあったのですが無事に大人になりました。3 月 11 日なんですけども、福島県郡山市という真ん中のところで被災をしまして、ちょうど社会人になってまだ 1 年経っていないくらいの年でした。その後は、もちろん実

家の方も地震の影響は受けてはいたんですが、幸い家屋が倒壊するということではなくて、家族とも無事に連絡が取れましたので、私は引き続き郡山市内の方で社会人として過ごすということをしておりました。その間に私の友人ですとか、NPO の知っている関係者なんかは避難所の設営ですとか、支援物資の振り分けなどに走っていたんですけども、私はまず社会人として自立をしないとイケないなということで、しばらくは民間企業で働いていました。

転機としては 2013 年 7 月くらいに、NPO の知人の方から、「あなたの出身の田村市で復興支援事業というのをやるんだけど、一緒にやらないか」とお声掛けをいただきまして、田村市復興応援隊という事業の復興支援員としてそこで働くことになりました。田村市の東部、この地図だと見づらいんですけども、福島第一原発から 20 キロ圏、30 キロ圏内に田村市内の東部の ^{みやこじまち} 都路町 というところがちょうど入っていたんですね。そこの避難指示が解除になるということで復興支援の事業が始まり、^{みやこじまち} 都路町 に入って活動していました。そこで主にコミュニティ支援だとか、住民の方々のやりたいことをサポートするというのを仕事にしていました。仕事をする中で田村市でもそうでしたが、双葉郡の関係者の皆さんと連携をとったり、一緒に何かできないかという話をしていく中で、浪江町の方とご縁があって、浪江町の役場職員の方と結婚しまして、2017 年 3 月ですね、浪江町が一部、避難指示解除になるとともに、夫と浪江町の方に移り住んだという経緯です。現在いろいろやっていますが、それをこれからお話します。

（資料 3）浪江町という場所ですね、海にも面していますが、もちろん山の恵み、川の恵み、いろいろありまして、本当に四季折々豊かな土地です。住んでいても思いますし、元々住んでいた方々からもすごく良いまちなんだというふうに聞いています。漁港があったりですとか、桜並木がすごくきれいで有名な場所があったりだとか、^{そうまのまおい}「相馬野馬追」という有名なお祭りがあったりだとか、そういう文化も自然も豊かな土地でした。

（資料 4）現在の浪江町の状況ですけれども、先ほど、みなみさんからもお話がありましたが、数字的なところを少しだけ話したいと思います。浪江町は震災当時ですね、21,434 名の方が住民として住まわっていて、双葉郡の中でも一番人口の多い町でした。3 月 11 日の発災直後に 15m を超える津波が来まして、今現在、原発の事故による避難先というのは 44 都道府県、全国に広がっています。先ほども申したように、震災から 6 年後の 2017 年 3 月 31 日に一部避難指示が解除になりました。死者は津波で亡くなられた方がほとんどで 182 名、居住人口は先ほど 5 月末の数字が出ておりましたので最新ですと 1,051 名の方が今、浪江町の居住地域に住まわれているということです。震災関連死も先ほどの話にあったように、どこかでストップしているということではなくて、年々増え続けている状況です。

（資料 5）これが浪江町概念図というか、再編図なんですけど、私たちが今住んでいますと言っているのは、資料の右側の海に面しているブルーの部分と、イエローの部分に住んでいます。赤い部分は帰還困難区域ということでまだ戻ることはできませんという地域です。町の約 8 割の面積になりますが、

この赤い所は森林の中というか、田舎、よくある本当に素敵な田舎生活、里山の生活ができていたと話に聞いています。「ザ！鉄腕！DASH!!」の DASH 村があったのもこの帰還困難区域の中でございました。

（資料 6）こちらでも簡単にご紹介したいと思います、インターネットの方で「浪江町復興レポート」と検索するとすぐ出てきますので、是非後で検索していただければと思いますが、住民の意向の調査結果ですね、帰還しないと決めている方が約 5 割に上っています、既に帰還している又は帰還したいと考えている人という方が 2 割を切っています。残りの 3 割がまだ判断が付かないということで、8 年くらい経っていますが、まだまだ決め兼ねているという状況ですね。

（資料 7）私が住んで 2 年ほど経っていますが、本当に浪江町で思うのは、浪江町の一番の課題って何ですかって聞かれるのがすごく一番困ることなんです、本当に課題がたくさん、どれを取っても課題というような所なんですけども、逆に言うと一旦人口もゼロになった、産業も一旦ストップした、だからこそできるチャレンジがあるっていうふうに前向きに考えていらっしゃる方が浪江町には今多いかなと思います。浪江町の様子もどんどん変わっていきますし、私も県内ではありますけど、移住をしてくる希望者がたくさん、たくさんといってもそんな多い訳ではないですが、数えられるほどは来ているので、その人たちと一緒に何かできないかなと考えています。

（資料 8）その中で一つが、「ゲストハウスあおた荘」という所を、私ともう一人、移住組で ^{いずみ}和泉 君というんですけども、二人であおた荘を運営し始めました。浪江町って集まる場所が本当に皆無で、どこかお店があったとしてもお昼で終わりです。コーヒー飲んでゆっくりお話ししようとかも本当に難しく、なので快くここを貸して下さる方に、私たちこういうふうに、いろんな方が出入りできて、一緒にお話ししたり、お茶を飲んだりできる場所を作りたいんですって言って、そういう所で誰でも使える集いの場ということで、こちらを運営し始めました。本当に、後でまた掘り下げていただけると思うんですけど、いろんな方に来ていただいています。

（資料 9）それから今日お話しします、任意団体「なみとも」なんですけれども、浪江で友達になろうという率直なネーミングなんですけど、基本的には町民と若者の交流の場づくりというところをやっています。元々の地縁というのが崩壊していますので、新しくコミュニティを作る必要がありましたし、私も一人で浪江で過ごしているときに孤独を感じました。私も友達が欲しいし、悩みを誰かに聞いてほしいし、ということはやっぱり場所がないといけないよねということで、場づくりをしています。私もみなみさんと一緒に、楽しいが一番だなと思っています。自分が楽しくやっているうちに、「あっなんか楽しそうだな」って言って混ざってもらったりして、そのうちに「じゃあ一緒に何かやれたらいいね」って声が増えていくんだなということを、この 2 年位でやっと実感としてあります。その辺のまた詳しいお話は後でお話しできたらなって思います。

簡単でしたが、以上、自己紹介でした。ありがとうございました。

○司会（安居）：小林様、ありがとうございました。

それではここから、パネルディスカッションに移りたいと思います。ここからは、コーディネーターの秋田主査にマイクを渡したいと思います。秋田主査、よろしくお願いいたします。

【パネルディスカッション】

○秋田主査：資料に基づく丁寧なご説明ありがとうございました。

まず、浜通りの状況についてもうちょっとお話をお伺いしたいと思いますけど、鈴木さんは今いわき市にお住まいで、小林さんは今浪江町にお住まいということなんですが、まず、鈴木さんからお聞きしたいと思うんですけど、いわきの場合、原発避難の対象とされた方が多く住まわれている地域です。

復興庁のデータに基づく、3県合わせてですけど、一番多いときで47万人避難されていて、今年の1月時点で3県でいうと約5.3万人、福島県に限っていうと約4.2万人避難されているということになっています。その中でも避難指示区域からの避難者は約2.4万人となっているんですけど、いわきの場合、原発からの避難者が多いということで、福島県の避難指示区域からの避難者が約2.4万人ということ念頭にちょっとお話ししたいんですけど、2013年8月時点だと公表されている数字で約8.1万人だったんですね。今では大分減ってきて2.4万人。とは言ってもそれでもそれだけいらっしゃるんですけど、どうですかね、鈴木さんの場合、避難されている子育て世代の女性の方をメインで支援、活動されていると思うんですけど、結構復興してきたなという感じなのか、それともまだまだなのかなという肌感覚というか、ちょっと教えていただけますでしょうか。

○鈴木氏：いわき市とか中心ということですかね、今、秋田さんに説明していただいた通り、いわき市は双葉郡からの避難者、本当に多くの方の受け入れをしています。いわき市自体も、皆さん海の町という印象があると思うんですけど、沿岸部は被災していて死者数もとても多いです。そういったふうに津波被害とかがあったいわき市で自分たちも被災しているんだけれども、被災者を受け入れなければいけないということで、大きな課題を抱えたまちでした。

2012年の頃でしたかね、その頃にいわき市役所に「避難者 帰れ」という落書きがされたというニュース報道がありました。避難者の今の数字見て、2.4万人いきなり増えたとなると、やはり交通機関、道路も混みます。医療機関も避難されている方、双葉郡の方とかですと医療費免除になるということもありまして、医療機関がすごく混むようになった。あとはスーパーも震災前よりものすごく混むようになって、利用しづらくなった。そういったふうに、生活の中でちょっと混乱が目立ってきてまして、そういったことで避難者が来たせいでこのまちが暮らしづらくなったというような語り口で語られるようになりまして、そういう意味でいわき市民と双葉郡の住民の軋轢というのがありました。

その流れですね、子育てしている人たちもすごく悩まれたと思うんですが、双葉郡出身だということとを理由にいじめに合うお子さんがいらっしゃるんですとか、いたということもあって、私去年1年間かけて、避難されているお母さんたちにお話を聞いたんですが、大体6割〜7割位の方々は避難して

来たということを言わないで生活してきていらっしゃる方が多いということでした。やはり言うてしまうと、それが何と言うんですかね、いじめですとか差別につながってしまうという恐怖感があるということで、そういった軋轢を無くすために、会話の場づくりをしたりですとか、いろいろやってはいるんですけども、今そういった軋轢は実際目には見えないですし、何となく見えなくなっているんですけど、潜在化しているだけで顕在化してこない、見えてこないだけで、奥底にまだまだあるなと思っていて、そういう意味では、今復興の状況をどう見ますかと言われますと、町の復旧とかは進んでいますけど、心の中の溝とかってというのは8年経っても無くならないものだなとつくづく感じているところです。

○秋田主査：ありがとうございます。復興庁としてもすべきことがたくさんあるなということを感じました。

続いて浪江町にお住いの小林さんにお伺いしたいんですけど、浪江町の場合、一昨年2017年3月末に居住制限区域、避難指定準備区域という所が解除になりました、人が少しずつ戻って来ているとはいっても、先ほどの小林さんの資料でも計算してみると10%も戻って来ていないという計算になるんですけど、どうですか、町の状況は少しは変わってきていますでしょうか。どうでしょうか。

○小林氏：そうですね、私が住んでいる場所の周りになりますが、最初は本当に、役場職員と戻るぞって決めて戻ってきた町民合わせて200名いくかいかないか位からスタートしました。なので、本当に人の声が聞こえないし、日々聞こえてくるのは作業員の家屋を解体する音だったりだとか、道路を往来するダンプカーですとか、野生動物の音が日々聞こえてきたような気がします。

2年経って、今千人超えてきて一番感じるのは、町に声が増えたと言うとちょっと漠然としているんですけど、いろいろ増えているんですね、お店、浪江町は元々飲食店が盛んで、その元々やっていた飲食店の方が戻って来て再開して下さったりとか、新しく浪江でビジネスチャンスかもしれないってことで、飛び込んできて飲食店を新規でやっていらっしゃる方がいて、今、浪江町20店舗近くの飲食店があるんですね。そういった意味では、夜笑い声が聞こえたりとか、皆で飲み会をしているなというのがすごく伝わってきますし、私もしています。それから、子どもたちの声も聞こえ始めていて、先ほどのスライドにもあったのですが「なみえ創成小・中学校」というところが、ちょうど1年ちょっと前に開校しまして、今、小中学校合わせて20名もいないような学校なんですけれども、それでもやっぱり子どもの声が聞こえるというだけで、町の人々の心の支えというか、希望にはなっているんだろうなということ、この2年目で感じるができますね。

ただ一つ、町の様子が変わったなと思うのは、家屋を解体されて戻って来ないと決めた方が、自分のお家を解体するということとても切ないような状況になっているんですけども、町の様子とか、通り沿いにあったあれが目印だったんだけど、その目印も消えてしまったとか、そういうことが起こっている、どんどんそういう歯抜けの状況になっていくんだなということは見取れますね。

○秋田主査：ありがとうございました。

次に御二人のことをお伺いしたいんですけど、まず鈴木さんは、震災前は山形にお住まいになられて

いて、ちょうど震災が起きる前に京都の大学が受かって、そして4月からその大学に入学されたということで、京都から遠い東北の地に、ボランティアとして足を運ばれてご活動されていたということなんですけれども、私なんか東京に住んでいましたけれど、東京からさえ足を運ぶのはすごく大変だったのに、更にそれよりも遠い京都から足を運ばれる、私から見てもすごく感心するし、すごいなと思うところなんですけれども、その鈴木さんのことを動かしたものというか、わざわざ大変な思いをして、なんでそこまでやろうと思われたのか、そのきっかけみたいなのを教えていただけますか。

○鈴木氏：この理由を話すと、すごくなんか自分が情けない気持ちになるんですけど、震災起きてすぐですね、4月から京都の大学に入学だったんですけども、ですので3月までは山形県米沢市というところに住んでいました。福島とか宮城とも隣接していますし、また大きな都市ですので、避難者の受入れもしていました。

4月から大学生活を送っていて、短大時代はボランティア活動なんかもやっていたんですけども、その当時震災が起きて、避難者の受入れを市内のあちらこちらの施設で行っていて、それを横目で見ていて、何かお手伝いしたいなという気持ちはあったんですけど、毎日避難所の前まで行って、声を掛けずに帰ってくるんです。ものすごく混乱した現場で、私が行ったらちょっとご迷惑になるんじゃないかという思いがあって、（泣いちゃいましたね、）毎日引き返して行って、そのとき何もできなかったなという思いがすごく後悔として残りまして、それからチャンスがあったら、何があっても必ず飛び込もうと決めて、それが原動力になっています。

幸いですね、私が進学した大学では災害復興支援室という特別な部署がありまして、大学教員ですとか、それからOBの方々からの寄付で学生が無料で東北に行けるように後方支援をして下さっていました。それもあって、例えば宮古に通うときはですね、京都から仙台までは夜行バスに乗って、仙台から宮古までは地元のバス会社さんをお願いして、大体10時間位かけて京都から毎週通って、授業がもちろん平日はありますので、金曜の夜に出て月曜の朝に帰ってくるというような形でやっていました。今考えたら不思議なんですけど、今だともう絶対にできないなと思うんですけど、そのときは疲れたとも思ったことはなかったですし、ものすごく活動している自分のことが好きでした。その当時、もう後悔したくないなという思いが、自分のことを突き動かしていたのかなと思います。

○秋田主査：素晴らしいお話で私もちょっと泣きそうに・・・、ありがとうございます。

続いて小林さんにお聞きしたいんですけど、震災前からまちづくり活動に明け暮れており、震災後は田村市の復興応援隊でご活躍されたりですとか、今は「なみとも」でご活躍されているということなんですけど、震災前と震災後でその活動の思いというか、その活動の頻度というか、結構変わっていますか。どちらもいわゆる社会課題に対応してということとはもしかして共通しているのかなと思うのですが、ちょっとその辺の感覚というか、教えていただけますか。

○小林氏：はい、ありがとうございます。

まず、私がボランティアとかまちづくりに没頭するようになったきっかけというのは、短大時代に学校でボランティアをやるボランティア学という授業です。必ずこの半年の間に 30 時間ボランティアをしてきなさいという授業だったんですね。本当それがなかったら、今たぶん私ここにいないと思うんですけど、それで地域の方々と初めて、自分の進んだ短大の近くの地域の方々と初めてお話をすることが増えていって、学校の中だと本当に学生とだけ、まあ後は先生とだけ話すということが多かったんですが、地域の方とお話すると、自分で今まで見たこともないような、聞いたことがないような世界が入ってくるわけなんですよ。それがものすごく自分の楽しみになっていったというのが、震災前の私のボランティアとかまちづくりに関してどんどん出ていく原動力になっていました。地域の人とお話するのが楽しすぎて楽しすぎて出ていたって感じですね。震災の後、その当時まちづくりとかボランティアにはもちろん興味、関心はあったんですけど、大学を卒業してすぐそういったまちづくりに関わる仕事をするというのは、ものすごいやっぱりハードルが高かったということがあったんですね。それまでは夢描いて、どこかのボランティアセンターに勤めるとか、自分や仲間たちと NPO を作って地域づくりをやったらおもしろいんじゃないかと、割と安易に考えていたんですけど、やはり何度か壁にぶつかっていくうちに、まずは自分は社会人として、自立して生活していけるだけの力をまず付けないと駄目なんだとすごくハッとなったのは、震災の直前位で、そこから民間企業に入って、自分の力を付けるぞって転換したんですね。なので震災後、ほとんどボランティア活動とかまちづくり関係とかに関わらずに、話を聞いたりしながら見ていたというのがあります。

ただその後やはり声を掛けてもらって、「^{な お こ}奈保子ちゃんは大学時代もいろいろやっていたし、田村市出身で、しかもまだ若くてフットワークが軽いから是非僕たちと一緒にやって欲しい」って、本当にお誘いを受けて、本当にありがたかったんですけど、社会人として自立したかどうかは分からないけど、そういう道にチャレンジしてみようかなって思ったのが、2013 年で、そこからはそういう安定したフィールドを与えてもらったので、まちづくりの仕事に没頭していったと。

ずっと一貫している思いはどちらかというと、「この人を助けたいから何とかしなくっちゃ」という思いでやったことはたぶん一度もなくって、これは震災前も震災後も私の中では変わらなくって、「自分ができるとって本当に小さいことなんですけども、誰かのためにの前に、自分がどれだけできるのかってこと、その自分ができることが誰かに波及して、その人の助けになったら OK!」というような、そういう考え方でやってきていたような気がしますね。

○秋田主査：ありがとうございます。そうですね、波及するの大事ですね。

ということでちょっと次にですね、それぞれの御二方の活動でいろいろネットワークを広げながら活動されているんですけども、よく社会活動の始め方とかで聞く話なんですけど、社会活動とかを始めるときに一番最初に始める人って「なんかあの人変わってるよね」とか「変な人だな」というところでよく見られがちで、その人に続いていく二人目からって結構楽だよみたいな話もあったりするんですけど、

とは言ってもある人に言わせれば、実際は二人目が一番、一番とは言わないまでもすごい重要なんだという話をしていますね、二人目が参加することで、その一人目の人が変に思われなくなるというとかですね、特に一人目の人が二人目の人を対等に扱っていくことで、二人目が付いてくるし、五人、六人と集まってくると集団になって、元々変な人だなんて思われていたのが、それが広がって行って、むしろメジャーな考え方になったりですとか、どんどん輪が広がって行ってですね、逆にその輪に入っていない人の方がむしろマイナーになって行って、自分もそっちに乗っからなくちゃみたいになって社会活動は広がっていくとおっしゃる方もいたりするんですけど、それで御二人の場合ですね、活動するに当たって、二人目の方ですとか、仲間を増やしていくに当たって何かコツというか、ポイントがあったらちょっと教えていただけますか。

○鈴木氏：それについては奈保子^{なほこ}さんの方がものすごく上手なんじゃないかと思うんですけど、私は仲間作りにかなり苦労している方だと思っています。ただですね、テーマを絞って子育て支援の活動をし始めたときから、やはり仲間が集まってきたなと思ってまして、それは何だったかいうと、自分事というか、自分が子どもを持っていて、自分が子どもとの暮らし、ここでの地域での暮らしを良くしていきたいという思いが念頭にあっての活動だったので、それが「私も私も、私も同じだよ」と言う人たちが出てきた、自分発信の課題というのはいさぐく仲間集めには良かったのではないかなと思っています。

○小林氏：上手ではないんですけど、私、仲間を増やすコツっていわれると何だろうなって考えていたんですけど、私は元々一人ではできないなって思っているですね、絶対一人じゃなくて、誰か一人でも二人でも多く共感し合った仲間ですべていけると、きっと良いスタートが切れるんじゃないかと思っている方なんですけれども、まずそれが前提にあって、私の場合は、身近な誰かにこういうことを実はやってみたいと思っているんだよねとちょっと世間話的に相談してみたりとか、後は震災後本当に良い相談役がたくさん増えたなと思っていて、原田さんや秋田さんもそうなんですけど、今せっかく支援に来てくださっている、外部から来てくださっている方々に自分の気持ちを少しでも伝えてみると、意外とすごく反応してくれたり、じゃああそこにつなげてみようかとか、じゃあお金のこととかも教えてもらったりとかして、そういう所から少しずつ輪が広がっているなと感じています。

○秋田主査：後もう一つだけ質問してから会場に振りたいと思うんですけど、そういった活動をするに当たって、今いろいろ活動の手段があると思っていて、対面でいろいろな人の所を回ったりですとか、SNSを活用したりですとか、いろんな手段があると思うんですけど、具体的にこういった手法は効果的だよねがあったら、ちょっと教えていただけますでしょうか。

○鈴木氏：私は SNS でのやり取りというのは何となくあまり響かないなという思いがあって、一番は対面だったんじゃないかなと思います。

私たちの活動で言いますと、ママサロンというのを開催してまして、その場で必ず会いたい対象になる方が集まって下さいます。その場所で会って話をするというのがやっぱり一番かなと思っています。

まして、ママサロンを始めてから、その前はヒアリングっていう形でインタビューする人とされる側ということで、そういった構造、関係になっていたんですけど、そうではなくて、ママサロンという場を取り入れたことによって、同じ目線で地域のことを見られるようになって話も深まって、そこでかなり仲間の輪が広がってきたなと感じています。

○小林氏：私は、SNS はよく使う方だなと思うんですけど、SNS はやはり外部の方々に対して、地元で、この地域で何が起こっているとか、今やっていることを伝えるには SNS は活用できるなと思うんですけど、私の活動の場合には、やっぱり地元のたくさんの方々に理解してもらって、一緒に共感してもらいながらやっていくっていうのがあるので、足で稼ぐではないですけど、対面して自分の気持ち、こういうふうにやりたいんだということを伝えて、そこでまたいろんな意見をもらってブラッシュアップしていくっていうのが、対面だったら可能なんだろうと思います。地域に入り込んでくるときに SNS がきっかけになるということはたくさんあると思います。ただ、それ以降はやはり対面が一番実になるのかなと思います。

【質疑応答】

○秋田主査：ありがとうございました。ではここから会場の皆様から質問をお受けしたいと思うんですけども、ご質問のある方は挙手の方、よろしくお願いいたします。

もしよろしければ、お隣同士でもちょっとこれまで聞いたお話の中で感想とか少し話し合っていて、その上で何かご質問したいことなどありましたらお受けしたいと思います。

○質問者①：一戸町役場の I と申します。こちらの内容にないやつというか、今までお二人が活動されてきた中で、逆に失敗したなと思う点と、あと、そこに対しての対策について教えていただければと思います。

○小林氏：今の浪江町ではなく、その前の田村市の活動のときに、大失敗した話で大変情けないんですけど、田村市の^{みやこじまち}都路町の方と本当にいろんな活動をしていたんですね。まちの子どもたちや住民の方、企業の CSR 部門の方々と料理教室をしようっていうのを年間を通して 4 回位やろうというのを活動の一つとしてやろうとしていたんです。それまで地域の、名前出しても構わないと思うんですが「^{めとろ}愛都路の会」のおばちゃんたちと連絡、調整を、それはもちろんメールとかではなくて対面でやっていたんですね、で、おそらく三回目位の料理教室のときで、一回目、二回目と新しい試みだったので、住民の方の負担感が結構大きくなっていたなというのをその当時私は感じてたので、違う住民の方にも声を掛けて、そちらの方を中心にやってもらうという案も良いかなと思って、元々やっていた「^{めとろ}愛都路の会」の人たちに伝えたときにものすごい大ショックというか、半分怒りのようなものを私に向けてきました。私としては重荷にならないように、日々の生活を立て直していくというところがその当時はあったので、もしかしたら重荷になっているかもしれないと私の中で変な気の遣い方をしてしまったんですね。なので、そ

の「愛都路^{めとろ}の会」の方々にとっては、もらった機会は私たちの力で頑張りたいということだったということを後から言っていたでいて、ちょっと上手く伝わっているか分からないですが、とにかく気の遣い方を間違えたっていうのが一番の大失敗でしたね。気を遣うんだったら本音で「その心配はしています」ということを最初に言うておかなければいけなかったなということとか、その後の、町民や私たち、企業の方々や子どもたちとの関係性のことで想像力を働かせなければいけなかったなというような、あのときは大号泣して謝りに行きましたけど。上手く伝わったかどうか分かりませんが、そういった大失敗がありました。

○鈴木氏：そうですね、失敗と言いますか、いつもいつも悩むところの話なんですけど、民間の取組をしますと、どうしても住民の方と行政の方との間に入ると言いますか、板挟みに合うことが大変多くあるなというふうに思います。上手に上手に伝えているつもりなんですけど、いつの間にか通訳者のような形になっているので、言葉には気を付けなくちゃという場面がたくさんあります。

それに関連して、2015年、16年位のときにですね、よく経産省の方ですとか、復興に携わっている方たちがプライベートで市町村を見学したいと、自分たちがやっている仕事でどんなふうに地元の人たちに受け入れられているのかということで、本当にプライベートで知り合いの方からのご依頼で何度も何度もご案内をしたことがあったんですけど、その中で、住民の方に見学に来られた方が怒鳴られるという場面がありました。本当に一度や二度ではなくて、どうしても対立構造になりやすくて、そういったものが起こっていたんですね。私も何というか、自分では機転を利かせて仲裁に入ったつもりだったんですけども、何回かそういった場面に立ち会ううちに口を挟むのを辞めてみました。住民の方たちの言葉を遮ることなく、全部丸ごと国の方たち、行政の方たちに聞いてもらう、そして行政の方たちからそれに対して何らかのリアクションをしてもらうことで、住民の方々がものすごく納得されて、自分自身の訴えたい気持ちですとか、というのをきちんと言えた。それまでは私が「この人はこうなふうに考えておっしゃっているんですよ」ということを言葉尻が強くなり過ぎないように通訳したつもりだったんですけど、そうではなくてですね、本当にこの人たちが訴えたいこととか、今困っていることは何かを吐き出してもらって、くみ取る、それに対してですね、それに対して真摯に向き合ってもらって、リアクションをしていただくという方が大事なんだなというのを大変勉強させられました。今でもやはり町民の方たちと町の方ですとか、行政の方たちの間に入るときには、余り自分の言葉で解釈というものを加えずに、コミュニケーションを時間がかかっても促していくということに努めています。

○秋田主査：ちょっとだけ深掘りしちゃいますけど、国の方がプライベートで行かれて住民に怒鳴られたということでしたけど、プライベートで行っているのに所属というか、どこかの人間というのが伝わっちゃって、それで例えば原発等の対応がなっていない的なこととか、そういったことで怒られたということですかね。

○鈴木氏：そうですね、もちろん見学に来られた方たちもご自身の所属を隠すことは最初からなくて、こういう者ですということで名刺もお渡しされながら話を進めていたんですけども、途中からこみ上げるものがあつたらしく、もう少し背景を話しますと、何回もそういったことはあつたんですけど、一つ私が印象に残っていたのはですね、いわき市というところで活動していたときに、いわき市は原発から30キロ以上離れているので賠償などもなく、ただ風評とかがあって、制限されている地域ではないけれども農業を再開できないという事情もありまして、そういったことに対して、行政の方たちの対応、住民の方たちはすごく期待感も高かったと思うんですね、何とかならないものかと。それも実際に担当の方と町の方が会われたときに高ぶって、1時間半位ですかね、外でカンカン照りの中で、陽を受けながらずっとその方のお話を聞くってような場面に遭遇しました。

○秋田主査：ありがとうございます。続いてご質問のある方、まだ質問をお受けしたいと思いますので、挙手いただけたらと思います。

○質問者②：宮古市のIと申します。若い方々がまちづくりに福島で取り組んでおられるって聞いて、すごく新鮮というか、実は私、震災の後に、福島の帰還困難区域から避難して十何回もあちこち転々と避難された方とか、あいは自主避難、子どもを福島で育てることに抵抗を感じて関東方面に避難されて方からお話はよく伺ってました。その方から「自分のうちはこうなのよ」って、お写真等でその状況を伺ったりとかしていました。また、福島と宮城と岩手で、被災地の方々のちょっとしたそういう会議があります。

岩手県の沿岸沿いで、宮古よりもっと北の方の知り合いが^{しいたけ}椎茸栽培をやっているんです。ついこの間、宮古に来たときに、未だに線量がかなりありました。山田町とかあの辺もあつたのですが、大分いいのかなと思ったら、未だにそういった検査をしなければならなくて、生産したのに検査のためのコストがかかって、出荷はできているみたいなんですけど、そういった心配もあつたり、そういった逆の話も随分と聞くんです。

そういう感じの所で、子どもを育てながら支援活動をされていること、取組をされていることにすごく感激しているんですけど、放射能のところで御心配というか、若い方々がそういうことに関して今どういうふうに感じていられるのかなという本質的なところをお聞きできたらいいかなと思います。

○鈴木氏：ありがとうございます。そうですね、放射能に関するついでに感じ方というのは、人それぞれだなと感じております。私は京都に大学のとき住んでいて、震災後、京都の避難者への支援というのもやっておりました。やっぱり避難している方たちは特に放射能に対する危機意識は、やはり強くあるなと思います。ですので、やっぱり避難された方たちの口からそういった不安の声が上がるというのは良くわかるなと感じました。

今、福島県内ですね、子育てをしている人たちなんですけれども、私は震災後に母になった訳ですけども、福島に移り住むときにやはり自分自身、かなり放射能に関する勉強はしました。自分の身を

守るだけの知識は付けたつもりだったんですけども、子どもを守るといのはまた別の話だなと思いついて、出産してからそういった悩みはかなり直面したといのはあります。数値がどうということではなくて、心の中の不安、精神的なものに起因するものであって、何となくこれが福島の難しさじゃないかなと日々実感しているところです。今、福島に住んでいる方たちの中でも、不安に思っている方もいらっしゃる方もいらっちゃって、口にすることができないという方も潜在的にいらっしゃるのわかります。去年、ヒアリングしていたときにですね、そういったことを不安だといことを言ってしまうと、皆さんから、「まだ気にしてるの」って言われるのがすごく嫌なんだ、だから隠しているんだっていうようなお話なんかも伺っています。なので、そういった方たちの拠り所として、放射能に不安のあるお母さんたちが集える場所を設置している団体さんが県内にありまして、いわき市では2か所あるので、私の場合には、もし不安のある方がいらちゃったら、そちらの方にご案内したりしています。

あとは、もう一つですね、放射能に関する勉強、震災当時お子さんがいらちゃった方はかなり勉強されたと思うんですけど、私のように震災後に母になった人はそういった勉強する所がなかなか無くなってしまっている。先ほどと重なりますけど、今更「不安だ」と言うとなんだか変な人だなと思われてしまう。「自分が良くてここに住んでいるんでしょ」と言われてしまう。それを隠すような現状がありますので、Iさんがおっしゃるように、私も震災後、母になって今だからこそ子どもを守るための放射能の知識を付けたい、安全だって押し付けるつもりはないんですけど、今の現状、数値はこれくらいですとかをお伝えする、後は何に気を付けたらいいのかお伝えするような場づくりといのを今年度、ママサロンと抱き合わせでそういった勉強会をしていきたいと思っています。私も日々勉強していきます。ありがとうございます。

○小林氏：^{しいたけ}椎茸と聞いてビビッと来ました。私の実家も菌床栽培の^{しいたけ}椎茸をやっているんですけど、震災前からやっていたんですが、当時はやはり放射線物質の影響を大変受けまして、菌床栽培の原木ではないんですけども、県内のオガクズを使ったために、^{しいたけ}椎茸に放射性物質の移行が見られた。なので数値が高くなってしまった、なので廃棄をしたという一連の、他の農家さんも同じような苦しみを味わっているかとは思っています。そのようなことを目の当たりにはしていたので、この問題はどこまで続くんだろうというような不安は正直今もあります。

実家のことといと、価格はまだ震災前の価格には戻っていないそうです。県内のオガクズを使えないので、県外からのものを使うっていう輸送のコストもまだかかっているといことは聞いています。

私個人の心配とか、どのように感じているかっていうところで、復興支援という仕事をする上ではやはり放射線の知識がないと、どうにもこうにも活動できないなというふうに感じていたので、ものすごい勉強はしましたし、環境省関係の方々当初からしばらくは勉強会を開いて下さっていたので、活用して、自分はここまでだったら大丈夫かなというボーダーラインのようなものを自分の中で身に付けて、今でもそのボーダーラインを超えるか超えないかを判断しながら生活してというのが、実際の所ですね。

ただ、浪江町に帰って来る人からは、放射線の話はほとんど出ないですね。今更話に出してもしょうがないよねという空気があるのかなというのと、本当に気にしていない方、浪江町に帰ってきている方はお年寄りの方が多いんですけど、「俺は後 10 年で死ぬから関係ないんだ」とかそういう言い方をする方が結構多いんですけど、とは言え「自分の畑で作った食べものを孫に食わせるわけにはいかない」だとか、お米を作ったけれども、風評被害がとて根強く残っていますので、そういうところでモチベーションの維持がすごく難しいという話はそれは日常的に聞く話ですね。

○秋田主査：他にもご質問のある方、挙手をしていただけたらと思います。

○質問者③：今、常磐線がつながってませんよね。いつになったらつながるんだろう。昔 50 年前に初めて常磐線に乗って、一戸^{いちのへ}から東京に行ったんですね。臨時列車だったものですから、駅もないとんでもないところに列車が止まって、いつ動くんだろうって言いながら太平洋の雄大な海を見て、山百合が咲いていた所に止まっていた印象がすごくあって、だから早く常磐線に乗ってまた海を見ながら行きたいなと思っているんですけど、こういった放射能の問題があって、いつ頃になったら、それがほぼ 50 年も前の話ですので、私が生きている内につながって、また乗れることを期待しているんですけど。

○鈴木氏：ありがとうございます。今、常磐線はですね、南の方は富岡町まで電車が来ています。北は浪江町です。富岡から浪江の間が今つながっていないという状況です。

○質問者③：原発のどこですか。

○鈴木氏：そうですね、大熊町、双葉町の所がまだつながっていなかったということで、今は代行のバスとかが出ているというような状況です。

○秋田主査：復興庁で公表している資料によると、再開通に関しては 31 年度末、今年度末ですね。

○小林氏：全線開通することは町の人もとても望んでいて、今全力でその線路沿いの工事が行われて、双葉駅だとかも新しく立て直しています。

○質問者③：期待したいです。

除染した土を山盛りにしていますよね、あれってどうなるんでしょう。あちこち、山盛りにしていますよね。

○秋田主査：それも適切に処分していくってことなんでしょうけど、私もすみません、所管外なのであまり答えられないんですけど。

○質問者③：あれもすごく見ていて、我が身にそれが起こったら大変だよねって、土いじりもできないよね。私も農家の娘ですので、畑とかそんなのできないじゃない。ニュースの度にあれを見ると悲しくなっているんですけど。

○小林氏：私たちも上手く言えないんですが、原発の周辺の大熊町と双葉町をまたいで中間貯蔵施設があり、ディズニーランド何十個分だったかの面積を整備しています。そこに県内の仮置き場に置いてあった除染された土を日々ダンプカーが運んでいるという状況ですね。あそこは無くなったねという所がぼつぼ

つ出始めてはいます。ただ、あれが何年かかって最終処分がどうなるかというのは私たちもちょっと分からないというところです。

○質問者③：見えるところからは消えるんだけど。

○小林氏：そうですね、無くなるわけではないです。私が土についての印象を聞いた話では、あれはただの土じゃなくて、家の思い出が詰まった土地の土なんだということを住民の方から聞いて、そう聞くと仮置き場を見る気持ちがすごい変わって、何ともならないんですけども、そういう気持ちの変化は私の中ではありましたね。

○質問者③：福島の問題でなくて皆の問題ですからね、やっぱり何とか皆が納得する形で、そのお金を企業どうのこうのうんぬんではなくて、皆がクリアな感じで明瞭会計じゃないんだけどそういう形になってほしいなと思います。

○秋田主査：ありがとうございます。お先に手を挙げられた方。

○質問者④：岩手県陸前高田市から来ました S です。よろしくお願いします。震災後、NPO 法人がたくさん立ち上がりまして、皆さんに努力していただきました。

10%位震災で亡くなって、まちが丸っきり、高田町という町が無くなって、その中でいろいろ外部の方、大学の方たくさん来ていただいて、NPO 法人とかたくさん立ち上げていただいています。

浪江町の方が震災時の 2 万 1 千人いたのが今は 1,008 名ですか、それでちょっとお伺いしたいのですが、ゲストハウスとかやっているのは、どういうお金でやっているのですか。お金のことで申し訳ない。

今後いろんな人も入ってきて、NPO 法人とかいろんな人たちが会社とか立ち上げて、まちをこれから大きくしていこうとしているときに、その人たちは寄付とか、そういうのでいろいろ事業をやっているんですけど、どういうふうな方法で継続してやっていこうと考えているのかなとふと思ひまして。

○小林氏：ありがとうございます。

まず、ゲストハウスあおた荘なんですけど、この場所は町民からお気持ちでお借りしている所です。最初やるに当たって、どうしても私たち貯金もないというか、お金もなかったんで、自分たちで掃除をしたりとか、ある程度の整備はお金をかけずに自分たちで行いました。ただ、当面の運営ですとか、どうしても大きいお金のかかってしまう修繕の部分なんかは、今ネットでもよく言葉が出てくるクラウドファンディングを使って、去年の 2 月～3 月の 1 か月間で 160 万円の資金を集めさせていただいて、これに関しては本当に浪江の方々だけではなくて、本当に全国の方々がやっとな浪江町で何かが立ち上がろうとしているんだねって、「初めて知ったけども応援するよ」という言葉をたくさんいただいて、その方々のおかげで今運営できているという状態です。ただ、そのクラウドファンディングの資金も続くものではないので、もちろん施設の利用料とか、寄付なんかは常をお願いしているような状況です。

ただ、私とやっている ^{いずみ}和泉 君と話しているのは、今後、ゲストハウスあおた荘という所で集う、浪江町で居場所として集う役割というものが、浪江町で他にも今ちょっとずつできてきてはいるんですよ、

なので、そういった場所が増えていったときに、ここを閉じるという可能性もあるよねという話はしています。それは決してネガティブなことではなくて、前向きに、元々浪江でやられていた方々が戻って来て、そこを拠点化することには関してはものすごく賛成なので、必要が段々無くなってきたら閉じることもあおた荘は考えたいというか、そういうことも大事にしたいよねという話はしています。ここでつながりが増えれば、あおた荘でなくても別な所でということがだんだん派生してきているというのが、2年目の今ですね。そんな形でよろしいでしょうか。

○質問者④：お金のことを聞いて申し訳なく思っています。経営が、運営が大変なんだろうと思って、クラウドファンディングみたいな、いろんな本を出すときでも何でも使われているみたいなんですね。

うちの方の山間部ではですね、陸前高田市も^{たけのこ}筍がまだ一部販売できなくて、「えっ」と思うかもしれないんですけど、あとやっぱりキノコが菌床でなく原木だと、木を青森の方から買って来て販売しなければならない。やっぱりそういうのがあって書類を作って、こういうので売れなくなりましたからって出したんですけど、かなりの膨大な資料なんで、福島の人たちは本当に大変なんだろうなって、つくづく感じたので、皆さんの経営の方も頑張ってくださいなと思っております。

○小林氏：ありがとうございます。

○秋田主査：ありがとうございました。そしたらですね、ちょっと時間も迫っているんですけど、最後に御一方手を挙げられていた方がいるので、それで締めにしたいと思います。どうぞ。

○質問者⑤：岩手県^{はちまんたい}八幡平市から来ましたKです。住んでみて2年ということだったんですけど、町の様子がどんどん変わってきて、これを読んで頭にちょっと浮かんだのは、すぐに答えが出るものではなくて、将来的に長い目で見たときに、お花が好きな方が集まって、ガーデニングご存知ですか、ガーデニングの蝶々がいっぱい来るああいうのをイメージしたいですよ。ここに住んでもらってね、お花が好きな方にボランティアで集まっていただいて、ちなみにいっぺん見てみないとわかんないけど、あおた荘のちょっと周辺にでもお花を置いてね。ちょっと疲れた方には、お花を置いていると和みますのでね。そういうことを長い目で、すぐ答えはでないよね。忙しいね。御二人とも大変だと思いますけど、うちらみたいなおばちゃんたちも集めて、うまく使って下さい。

○鈴木氏・小林氏：ありがとうございます。

○秋田主査：今のはコメントということでよろしいですかね。

では、ここでマイクは司会に返したいと思います。

○司会（安居）：たくさんのご質問をありがとうございました。

それでは最後に閉会に当たりまして、復興庁男女共同参画班の原田参事官から閉会のご挨拶をさせていただきます。原田参事官、よろしくお願いします。

【閉会挨拶】

○原田参事官：本日の分科会を主催しております、復興庁の男女共同参画班の参事官の原田でございます。

本日、このような形でたくさんの方にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。また、非常に貴重なお話しいただきました、cotohana の鈴木みなみさんと、なみともの小林 ^{な お こ} 奈保子 さん、本当にありがとうございました。

非常に良いお話を聞かせていただいたと思っております、失敗の話も含めて、非常にご苦勞をされながら今に至っているんだなということをつくづく感じたところでございます。本日のタイトルが「私にもできる！人と人のつながりを活かした復興支援の事例紹介」ということでございましたけれども、本日のお話を聞いて、ここにお集りの方々も「私にもできる！」と思っただけただかどうか。ただ合わせて、この内容の中に「被災地の復興のために何かしたい、でも何から始めて、どう続けていいのかわからない」ということで皆様にご参加を呼びかけたところですが、本日のお話の中でございましたけれども、自分発信の課題ですとか、いろいろ自ら感じていらっしゃることをどう解決していくか、あるいは、そもそも課題と捉えずに、自分が楽しみたいからいろいろと工夫をされ、また、周りの方にも楽しんでもらいたいということで周りを巻き込んでいくというような取組だからこそ続いていけるのかなと、私自身思ったところでございます。

皆様方もいろいろな課題や、思いをお持ちだからこそこういう所にお集りいただいていると思いますので、是非そういったものを大切にさせていただいて、御自身でいろいろと活動を始めたり、あるいは周りの方に働きかけをしてつながっていくなりしていただければ良いのかと思います。また、人と人のつながりが大事ということでございますので、本日も良いつながりの場だと思いますので、是非皆様方も一つのきっかけといいますか、出会いの場ということで、本日お話しいただいた、cotohana の鈴木さんなり、なみともの小林 ^{な お こ} 奈保子 さんを是非応援していただければ大変ありがたいと思います。

また、本日非常に良いお話を私も聞かせていただいたと思いますので、皆様方も周りの方にこのお話を広げて行っていただければ、また大きな広がりにつながっていくのではないかと思います。

本日はどうもお集まりいただきまして、ありがとうございました。お二人に改めて盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

以上